

舒群「没有祖国的孩子」の周辺

平石 淑子

舒群は本名を李書堂、又李旭東と名のつたこともあり、他に黒人という筆名を持つ。一九一三年九月二十日、黒竜江省哈爾濱市の左官の家に生まれた。極貧の生活で、父親は職を求めて一家と共に阿城、一面坡、哈爾濱等を流浪した。その悲惨な生活は幼い舒群の脳裏に沈痛な記憶として刻みつけられたとい⁽¹⁾う。

舒群は七歳の時、阿城の西營小学校に入学するが、制服を作る金がなかったために追い出され、その後一面坡の珠河県立二小で三年半学んでいる。十五歳の時(一九二七)、哈爾濱市立男子第一中学(当時は広益中学)に入学するが、ここでも給食費が払えず、二ヶ月で退学となる。が、彼の向学心は少しも衰えず、たまたま知り合った朝鮮族の少年の助力を得て、ロシア人鉄道員の子弟が通う中東鐵路路員子弟学校(東鉄蘇聯鐵路職工子弟第一中学、通称紅俄学校⁽²⁾)以後紅俄学校と呼ぶ)に特別に入学を許可されるのである。この紅俄学校が「没有祖国的孩子」の舞台であり、前述の朝鮮族の少年が果里のモデル(以後「果里」と呼ぶ)となるのである。

紅俄学校のあった一面坡は、現在は黒竜江省尚志県内の小鎮

舒群「没有祖国的孩子」の周辺

であるが、哈爾濱と牡丹江のほぼ中間、松花江支流の螞蟻河のほとりにある、中東鐵路の主要駅の一つであった。中心となる通りの両側には、日本のアヘン館や外国商社、質屋等が並び栄えていた。民族色豊かなこの町には、日本人、朝鮮人、ロシア人、キリスト教徒等がそれぞれの学校を設立していた。これらの学校にはそれぞれ勢力範囲があり、子供たちの純粋な心は大⁽³⁾人たちの心理を鏡のように反映し、彼らの間には自然と階級や民族の対立意識が芽生えた。休日になると彼らの間で本気とも遊びともつかぬいざこざが絶えず、時には流血の事態に及ぶこともあった。舒群もよくその乱闘に加わったが、「果里」がい⁽⁴⁾つも加勢してくれたという。

紅俄学校の学生だった「果里」は、舒群を彼の担任である、二十五、六歳の、まだ三十歳にはなっていない若いロシア人女性教師、周雲謝克列娃のところへつれて行く。言うまでもなく彼女が「没有祖国的孩子」の蘇多瓦のモデルである。「果里」はしばらく彼女とロシア語で話をしてしたが、結局入学は許可できないと言われる。それを聞いた舒群は泣き出し、周雲謝克列娃がどうなだめても、頑としてそこを動かさなかった。はや日も暮れかかり、しかたなく彼女はこの貧しい中国人の少年を自分の家へつれて行き、夕食を食べさせ、何冊かのソ連の画報を見せる。舒群はここで初めてレーニンとスターリンの像を見たのである。彼の熱意に動かされた周雲謝克列娃はとうとう彼に入学を許し、学費を与えたばかりでなく、必要な学用品、衣類をすべて整えてやった。更に彼女は毎日舒群を自宅に

呼び、ロシア語を補習し、革命の道理を教えたという。彼はこれまで、両親以外にこんなにあたたかく自分を迎えてくれる人を知らなかった。舒群は最年長の学生として三年に編入され、「没有祖国的孩子」の果里沙のモデルとなったロシア人の少年（以後「果里沙」と呼ぶ）と出会っている。「果里沙」の父親は中東鉄路の機関士で、母親も鉄道で働く労働者だった。担任の周雲謝克列娃は、はじめ文学を教え、それから政治を教えた。彼女は学校の必修科目である十月革命について、民間の言い伝えやレーニンのエピソード等を交えつつ語り、また時には山の上や川のほとりで、革命に関するさまざまな物語を話して聞かせた。ある日、彼女は舒群にたずねた。「ゴリキーを知っていますか？ トルストイは？ プーシキンは？」自分の無知を恥じる舒群に彼女はこう言った。「無知は罪ではありません。学ばないことこそ恥です。」それから日曜、祝日、下校後、就寝前等の時間を利用し、彼は彼女からさまざまな知識を学んだという。董興泉「舒群和他的第一个老师」⁽⁵⁾によれば、舒群は後に、「彼女は私の文化の教師であるばかりでなく、最初の政治の教師である。」と語ったという。解放後、彼は敬愛する周雲謝克列娃を記念し、「我的女教師」⁽⁶⁾という一文を書いている。⁽⁷⁾

だが、それから一年もたない一九二八年の春の終わり頃のことである。東省特別区哈爾浜特区教育庁が一面坡に第六中学を新設することを決め、それに先がけて一人の督学官が紅俄学校を参観に来るのだが、彼は学生の中に舒群の姿を見つけて怒り狂い、「中国人は紅俄学校で勉強することはできません！ 中国

人は共産党の書物を読むことはできません！」と叫び、強引に六中への転校を命じたのである。周雲謝克列娃は、別れに臨み、彼に共産主義についてわかりやすく書いた本とロシア語の文法書を贈ったという。⁽⁸⁾

学費を免除する、という督学官のことばは全くのでたらめで、家族の援助を得て舒群は六中にかろうじて二年近く通うことができた。そして一九三〇年初め、級友たちの援助で再び哈爾浜市立男子一中にもどり、そこを卒業している。⁽⁹⁾当時の一中には革新的な考えを持った教員も多く、また紅俄学校で受けた革命の教育は、舒群に大きな影響を与えていた。一九二九年七月、蒋介石が中東鉄路をソ連から強行回収し、兩國の国交が断絶、多くの在中ロシア人が捕えられ、ソ連系の学校は授業を停止するという事件がおこった。一中もこの事件の影響を受け、校内は反帝反日と反ソの二派に分かれた。このうち反帝反日派は、中国共産党指導下にある反帝大同盟が主導権を握っており、主流であったという。この事件で「果里沙」の両親も捕えられ、哈爾浜に収監された。舒群は恐らく祖国に帰ろうとしている「果里沙」を見送って、こう言ったという。「僕は中国の反ソ戦争には反対だ。侵略に反対し、日本が滿蒙五路を修築するのに反対し、日本帝国主義をやっつけるんだ。」彼の胸の中には恐らく、周雲謝克列娃や「果里沙」たちを通じ、革命ロシアに対する熱い尊敬と憧憬が渦まいていたにちがいない。舒群は当地で行なわれた示威運動や宣伝活動に参加し、また魯迅、茅盾、田漢、蔣光慈、楊騷、白薇等、新しい作家の作品を読ん

だとい⁽¹²⁾う。

一中卒業後、舒群は海軍の経営する商船学校⁽¹³⁾に入学する。この学校が学生の衣食住を官費でまかなってくれるばかりでなく、必要な学用品の他に毎月五元の補助費を支給してくれるためであった。商船学校は、高等中学一年の学歴がないと受験資格がなく、まともに学校に通っていない舒群にはそれがなかったわけだが、幸い彼をかわいがってくれた二人の教師が彼のために補講をし、ついには偽の証明を書いてくれ、入学することができたのである⁽¹⁴⁾。この商船学校で、彼は後に楊靖宇⁽¹⁵⁾と共に磐石の義勇軍を率いた傅天飛⁽¹⁶⁾、青島地下党の市委員会書記となった高嵩⁽¹⁷⁾らと出会っている⁽¹⁸⁾。

商船学校に入学したことで彼一人の生活は保証されたが、彼の家族の生活は相変わらず貧乏のどん底であった。半年後、彼は退学し、生活のために哈爾濱道外北九道街にある航務局にロシア語の通訳として就職する⁽¹⁹⁾。当時の航務局には白系ロシア人の職員が多かったので、通訳が必要とされたのである。航務局での待遇はよく、一ヶ月六十元という、当時としては破格の高給であったが、間もなく九・一八事変が勃発（一九三一）し、舒群は抗日義勇軍に身を投じる。『学生義勇軍』と呼ばれたこの組織を率いていたのは、一面坡の大地主出身の軍人で、一中の軍事教官を勤めた車凌雲という男であったが、間もなく舒群はこの組織に疑問を感じて脱退⁽²⁰⁾、一九三二年三月、第三インターナショナルの情報員となり、九月には中国共産党に入党している。この頃から一九三四年初め青島に脱出するまで、彼は第三

インターの情報収集活動に従事すると共に、『黒人』の筆名で詩や文章を書くようになり、それらの文学活動や革命活動を通じて、後に『東北作家』の名を広く世に知らしめた蕭軍、蕭紅らとの交友を深めるのである⁽²¹⁾。第三インターでの活動及びこの間の哈爾濱における舒群のさまざまな交友関係については、すでに拙稿「蕭紅をめぐる人々(白)」（『野草』三十一号）に整理したのでくり返さない。

第三インターの組織との関係は一対一を原則としていた。即ち舒群は楊佐清⁽²²⁾という一人の指導者を通じてのみ、組織と連絡があったのだが、一九三四年一月、彼は突然その連絡を失ってしまう。しばらく哈爾濱で連絡を待ったが得られなかったため、三月、青島に脱出するが、これには商船学校時代の友人たちの援助が大きかったという。舒群がかつて籍を置いた商船学校は、九・一八後、青島の本校と合併され、甲・乙・丙三班に分かれていた同級生のうち、甲班だけが合併に伴って青島に移っていたのである⁽²³⁾。この中には前述の高嵩もいたし、また後に台湾で国民党の幹部になった者もいた。無一文、無一物の舒群は、この友人たちからさまざまな生活上の援助を受けたという。そして間もなく彼は青島の地下党员倪魯平を知り、四月か五月頃、彼の三番目の妹でやはり地下黨員であった青華と結婚する。「没⁽²⁵⁾有祖国的孩子」の構想が練られはじめたのはこの頃であった。結婚して「居場所⁽²⁶⁾ができた」と喜んだのも束の間、青島の地下党に裏切者が出たため、八月仲秋、国民党藍衣社の大掃討にあい、中秋節を祝うため倪家に招かれていた舒群夫婦

は魯平と共に逮捕される。だが幸いなことに、舒群は青島に来て日も浅く、党との連絡関係が未だ確立しておらず、また哈爾浜での活動も把握されていなかったため、一九三五年三月、彼一人が釈放された。この獄中で再会した高嵩に励まされて「沒有祖國的孩子」の草稿が完成されている。⁽²⁷⁾ 釈放後、舒群はただちに青島を離れ、煙台を経て上海に行く。倪兄妹の消息は今もってわからないという。⁽²⁸⁾

一九三五年、私は上海のフランス租界、我々が美華里と呼んでいた地区の亭子間に住んでいた。亭子間というのは上海の、貧乏人の住む一番小さな部屋のこと、陽当りのいい大きな部屋は前楼という。私は二階の亭子間に住み、その上の前楼に住んでいたのが白薇だった。彼女は当時左連の一員だった。私は「沒有祖國的孩子」を書いていたが、夏のこと、部屋は暑く、いつも戸を開け放していた。彼女は階段をあがったり降りたりするたびに私の部屋の前を通った。時には中をのぞくこともあった。私は二十歳を少しすぎたばかりだった。彼女は私よりもずっと年上で、貧しい私の姿を見て気の毒に思っていたらしい。彼女の使用人が食べる物を届けてきたことがあった。その後のある日、彼女は私を訪ねてきてこう質問した。「あなたは何をしていますか」私が「私は東北の人間です」と言うと、彼女は九・一八の問題に思い当たようだった。それから彼女は私の机の上を見た。そこには書きおえたばかりの「沒有祖國的孩子」の原稿があった。彼女はそれを手に取り、ちよつと目を通してみたいへん喜んで

だ。「むこうで読ませて下さい」と言って彼女はそれを自分の部屋に持って行ったが、何日かたって私にこう言った。「あなたの小説はとてもよく書けていますよ。私が周揚に渡しておきました。」これは全く偶然のできごとだった。

これは私が舒群から直接聞いた「沒有祖國的孩子」が世に出たいきさつである。⁽²⁹⁾ はじめは人に頼んで魯迅に見てもらおうと思っていたが、それが果たせないでいるうちに白薇に出会ったのだという。この原稿は周揚の手を経て左連に提出され、蘇靈揚の助言により若干の改訂が加えられた後、〈文学〉一九三六年五月号に掲載された。⁽³⁰⁾ そして抗日の気運の高まる中で大きな反響を呼んだといわれる。

「沒有祖國的孩子」が発表された直後、周揚は「現階段的文学」⁽³¹⁾の中で、蕭軍「八月的鄉村」、蕭紅「生死場」に続いて舒群を紹介し、礼讃している。

失われてしまった土地、祖國のない人々、これらの主題は現在特に重要な意義を持っている。最近登場した新進作家舒群が、彼の健康で、また素朴な風格を以て、ほとんど人々の注意を引くことのない、國を失った子供の物語と、今まさに侵略されつつある、我々が忘れてしまっていた東北の同胞の生活と闘いを描き、すばらしい新鮮な効果をあげたということは我々の大きな期待となった。⁽³²⁾

また周立波は「一九三六年の回顧」の中で多くの東北作家について特筆し、「今年創造力が最も豊かであった新作家」として舒群に言及している。

彼は祖国を失い、ふみにじられ、差別された人々の生活を描き、ゲリラや東北人の反抗と闘いの物語、九・一八以後の東北の学生の愛国の活動や獄中生活を描いた。彼の描く人物は非常に素朴、率直、勇敢であり、独立した人格と誇り高い心を持っている。これは亡国の民の顔をした「恐日病者」の心理とちょうど対置されたものである。彼の描く人物のもう一つの特徴は、民族と自分自身に対して加えられるあらゆる圧迫に対してがまんできないということ、これは我々の多くの同胞が、異民族の如何なる迫害や侮辱に対しても奴隷のように容認するという特性を持っていることとは完全に同じでない。解放を闘い取ろうとする中国民族は、正にこのような人物を必要としているのである。舒群の小説が多くの読者に支持されたのは、単にその明快さと新鮮さだけではない。

大部分は彼が現在正に必要とされている民族解放運動の原動力を描いていることによるのである。

即ち舒群の「没有祖国的孩子」は、当時の抗日戦争、民族解放戦争の気運の高まりの中で、それらを支え、励ますものとして歓迎され、評価されたのであった。そしてそれは、舒群を含む東北作家全員に対する、東北作家たちの言う「祖国」即ち「関内」の総体的な評価でもあった。

その評価に異義を唱えるつもりはない。生きるために奴隷的な忍従の生活に甘んじ、誇り高いロシアの子果里沙に「この世界に朝鮮なんて国はないぞ」とのしられながら次第に民族の誇りに目覚め、最後には彼が恐れていた悪魔（日本人）の前で

「僕は朝鮮人だ」と胸を張って叫ぶに至る、というストーリー、民族の解放と独立という主題は、周揚や周立波が指摘したように、当時において非常に今日的であり、かつ先進的なものであった。張作霖の軍旗が青天白日滿地紅となり、更にそれが「地図や万国旗の中に我々が一度も見たことのない」旗に変わり、ソ連の学校が閉鎖され、教員も学生もすべて祖国ロシアに帰ることになった時、ただ一人帰るべき場所のない果里に対して蘇多瓦は厳粛にこう言う。

「果里、あなたは果里沙と行くことはできません。将来朝鮮の国土の上にあなたの祖国の旗をたてるのは、それは朝鮮人の責任です。それはあなたの責任です！」

このことばは今私の胸を打つ以上に、当時の中国の読者の胸の中で強く反響したことであろう。

だが、舒群「没有祖国の子」の文学的個性は、単に「抗日文学」としてのみ定義づけられておわるものではないこともつけ加えておきたい。この作品は、紅俄学校というソ連の学校を舞台に、果里という朝鮮人の少年を主人公とし、主要な登場人物のうち唯一の中国人である「私」（これも果瓦列夫というロシア名で呼ばれる）は単にストーリーの展開を助けるつなぎの役割しか果たしていない、という非常にユニークな構成をとっているが、これには彼自身の特異な経歴が大きく反映している。であって、彼のそういった経歴を可能にしたのは哈爾浜という都市の特殊性であったということ忘れてはならない。

哈爾浜は十九世紀の終り、帝政ロシアが清から東清鉄道、即

ち中東鉄路の敷設権を獲得したのに伴い、中東鉄路の基地として建設された新しい、異国情緒にあふれた都市であった。そこには中国人、ロシア人をはじめ、さまざまな民族が住みつき、それぞれの民族の喜怒哀楽、それぞれの民族相互の友愛や対立がすべてのみこまれていた。哈爾濱地下黨員で舒群とも親交のあった姜椿芳は、一九三〇年代当時の哈爾濱についてこう記している。

第一次世界大戦が終り、ロシアの十月革命が勝利をおさめた後、ヨーロッパ各国の生計の道を求める多くの人々が、大量の白系ロシア人を含めて思い思いにおしよせ、この片隅の地哈爾濱に一つの「洋世界」——一時は東方のパリ、またモスクワと呼ばれた——を作りあげた。哈爾濱は、規模はわりあい小さかったが、東南の上海とはるかに呼応して、やはり一つの非常に特徴のある西洋風の場所であった。⁽³⁵⁾

彼は更に続けて、ただし中国人は、特に文芸方面において西洋人とは隔たっており、青年たちの目を外に向けるには上海からの新文化の導入を待たねばならなかったことを指摘しているが、このような環境が青年たちの精神に与えた影響が決して小さくはなかったことは容易に想像できる。舒群の「没有祖国的孩子」が構成において非常にユニークであることは既に述べたが、更に特徴的なのは、ここに登場する朝鮮人、ロシア人、中国人を、それぞれ同等の人格として描き得ているということである。これは彼自身を育てた環境と無縁であるはずがなく、彼はその中から極めて自然に中国人としての民族的自覚を得てい

ったにちがいないのである。それがいつごろのことかは判然としないが、恐らくロシア人女性教師周雲謝克列娃との出会いが大きく影響している。そして彼の周雲謝克列娃に対する尊敬は、恐らくロシア民族に対する尊敬に発展したであろう。「没有祖国的孩子」の果里沙も蘇多瓦も、如何にも誇り高く堂々としている。舒群が共産党に入党する以前に第三インタールの情報員になったのも、単にチャンスだけの問題かもしれないと思いつつ、そのへんの彼の心理が働いたのではないか、とも想像してみるのである。

「没有祖国的孩子」は完成度の高い作品とは言いが、それが中国人の胸を打つと同時に、今私を強く引きつけるのは、その主題もさることながら、そこににじみ出る作者の人間性、言いかえればヒューマニズムに負うところが大きいように思う。そしてその人間性、ヒューマニズムこそ、東北という土地にあたたかくはぐくまれたものであったに違いない。すでに述べたように、舒群を含む東北作家を抗日作家として評価しようとする自体に異議はないが、彼らの描く題材、背景が哈爾濱を中心とする東北の特殊性、地方性に深く裏打ちされていることに思い到るとき、彼らを東北という地方の生んだ郷土作家としてとらえようとする目も必要なのではないか、ということとを最後に指摘しておきたい。⁽³⁶⁾ (一九八二・九)

注

(1) 里棟、小石「舒群伝」(『東北現代文学史料』第二輯 80

・ 4 遼寧社会科学院文学研究所、黒竜江社会科学院文学研究所共編)

(2) 紅俄は革命ロシアの人民を指す。これに対して帝政ロシアの遺民を白俄(白系ロシア人)と呼ぶ。

(3) 「舒群伝」

(4) 帝政ロシアが一八九六年九月、露清カッシニ条約によって利権を獲得した東清鉄道のことである。一八九七年二月、露清銀行により東清鉄道会社(大清東省稽查鉄路進款公司)が設立され、一九〇一年十一月、哈爾浜——綏芬河約五四〇kmが完成、一九〇二年一月、哈爾浜——滿州里約九六〇km、一九〇三年一月、哈爾浜——旅順口約七七二km(南部支線)と營口線がそれぞれ完成、半年後に綏芬河からシベリア鉄道への接続が完成した。一九〇五年九月五日の日露講和条約で南部支線の長春以南が日本に譲渡されている。その他の線は、ロシア革命以後は中ソ合併となっている。(原田勝正「満鉄」81・12 岩波新書)

(5) 〈東北現代文学史料〉第三輯 81・8 (目次は81・4) 遼寧社会科学院文学研究所編

(6) 一九五〇年二月十六日、沈陽で書かれる。他の七篇とあわせ、一九五四年、遼寧人民出版社より出版。未見。前出「舒群和他的第一个老師」がこれを基盤に書かれており、本稿はとりあえずそれを参照した。

(7) 「舒群和他的第一个老師」及び「舒群伝」

舒群「没有祖国的孩子」の周辺

(8) 同(7)

(9) 一九二九年末、一中の学生だった幼な友だちの温少筠が冬休みに帰宅した時、舒群に復学を勧める。温は自分の母親に相談し、自分たちが舒群の学費等一切を世話することにし、また何人かの友人たちが学校側に談判して規則をまげて入学許可をとりつけ、こうして再び彼は一中ロシア語八班で学ぶことになる。(「舒群和他的第一个老師」)

(10) 一中は有名な共産黨員王礼禮が校長を勤めたことがあり、また「紅色老師」と呼ばれた三人の教員がおり、舒群はその中の一人、語学教師の楊定一に特にかわいがられた。(これは八一年六月、蕭紅生誕七十周年記念会に参加するため哈爾浜を訪れた舒群から筆者が直接聞いたものである。)

(11) 当時「滿蒙分離」という目標の下に、北伐に反対し張作霖を支持していた日本、田中義一内閣は、一九二七年十月、満鉄社長山本条太郎に命じ、張作霖に対し、敦化——老頭溝——図們江岸、長春——大賚、吉林——五常、洮南——索倫、延吉——梅林の五本の鉄道の敷設権を強引に認めさせた。長春——大賚を除く四本については、張作霖爆死(一九二八年六月四日未明)の直前、五月十三日と十五日に最終調印が行われている。(「満鉄」)

(12) 「舒群和他的第一个老師」及び「舒群伝」。当時、哈爾浜道外十道街に哈爾浜書店という本屋があり、他の本屋

- では手にはいらぬ本が買えた。舒群はそこで「マルクス主義十二講」や、蔣光慈や白薇の本を買ったことがあるという(81・6 舒群談)。一九二九年、張学良が北伐に屈して「易幟」したのに伴い閉鎖される。(舒群「早年的影」80・8・27 11・23重改〈東北現代文学史料〉第三輯)
- (13) もともと青島の海軍学校の分校で、一九三二年、本校と合併される。(「早年的影」)
- (14) 「舒群伝」
- (15) 一九〇五・二・一六―一九四〇・二・二三 河南省确山县李湾村の農民出身。本名馬尚徳、字は驥生。張貫一と名のったこともあり、南滿游撃隊にはいつて後楊靖宇を名のる。一九二七年五月、共産党入党。一九二九年春より東北で活動する。(「東北抗日烈士伝」第一輯 80・7 黒竜江人民出版社)
- (16) 「早年的影」〔(12) 参照〕は舒群が傅天飛を記念して書いたもので、「憶天飛、念抗聯烈士」の副題がある。
- (17) 一九四五年「八・一五」前夜、膠東の山東八路軍の指導者として抗日戦争の犠牲となる。(「早年的影」)
- (18) 「早年的影」
- (19) 「舒群伝」。就職に際しては、彼の同級生王福麟の父親で東亜輪船会社の総経理兼航務局董事長であった王魏卿と、商船学校校長兼航務局総経理であった王時沢の尽力があった。(「早年的影」)
- (20) これには傅天飛のそれとない助言があったという。(「早年的影」)
- (21) 「早年的影」、舒群談(81・6)及び「舒群伝」
- (22) 一九二一―一九三〇年中国共産党入党。一九三二年冬から一九四二年秋まで第三インターの情報活動に従事する。(董興泉「舒群与蕭軍」〈社会科学輯刊〉81―2 81・3・30)
- (23) 舒群談(81・6)。「舒群伝」では一九三三年末。
- (24) (13) 参照。
- (25) 舒群「『没有祖国的孩子』照片并簡略説明」(〈東北現代文学史料〉第三輯)
- (26) 舒群談(81・6)
- (27) 「早年的影」
- (28) 「舒群伝」、舒群談(81・6)及び「舒群与蕭軍」
- (29) (10) 参照。
- (30) 「『没有祖国的孩子』照片并簡略説明」
- (31) 〈光明〉一一一 36・6
- (32) 〈光明〉二一一 36・12
- (33) 「没有祖国的孩子」
- (34) 九・一八後、中東鐵路は周圍に張りめぐらされた満州国固有鉄道網のために経営困難におちいり、一九三五年三月二十三日、ソ連から日本に正式に譲渡され、それから十日ほどのうちにロシア人従業員はすべて引きあげたという。(「満鉄」)

(35) 「金劍嘯与哈爾濱革命文芸活動」(東北現代文学史料)

第一輯 80・3 黒竜江社会科学院文学研究所、遼寧社会科学院文学研究所共編

(36) 以上のような観点から書いた拙稿「蕭紅『生死場』論」

(人問文化研究年報)第四号 80 お茶の水女子大学人間文化研究科)がある。併せて参照いただければ幸いである。

追記 文中、筆者が舒群より直接聞いたとして紹介した部分は、筆者の記録にもとづいて筆者自身が再構成したものであり、舒群自身の校閲は経ていない。(八三、一)

卒業論文・修士論文題目

昭和五十七年九月卒業(二名)

野村 尚子 『荀子』楽論における中国古代音楽思想とその展開

昭和五十八年三月卒業(十二名)

池田佳津江 楊沫研究——『青春の歌』を中心として

上田ゆかり 曹禺『日出』十二色相色環の人間模様より見た一

九三〇年代上海の人間群像

加藤 朱美 劉白羽について

木谷富士子 曹禺『王昭君』研究——王昭君伝説の流れの中で——

舒群「没有祖国的孩子」の周辺

高坂ゆかり 魯迅と二葉亭

小松あけみ 謝冰心——『分』への足跡——

豊田 恭子 中国「個人主義」思想の系譜——周作人を手がかりとして

中沢みゆき 紅樓夢研究——飲食物並びに薬物語彙を通して——

丹羽 圭子 『太平広記』鬼類における鬼を避け追い払う為の有効な手段について

福地佐和子 老舎小説における「飲食」語彙研究——体言を中心として——

山本加寿代 齊詩についての一考察

栗山千香子 高曉声初探——『李順大造屋』を中心に

昭和五十八年三月修了(二名)

白田真佐子 江永『古韻標準』研究

戸沼 市子 時代の転換期における知識人——阮籍・嵇康と長

明・兼好をめぐる——